

続ひまわりのスペイン

佐藤 玖美子

有難いことに、思いがけず今年も去年にひき続き、夏休みをスペインで過ごすことになった。昨年帰国後、“ひまわりのスペイン”と題して、8年振りに訪れたスペインの印象を綴ってみたが、2年続けて訪ねたスペインについて、どうしてもまた書いてみたくなった。去年書いたことの後日談もあるし、正直なところ、短期間の旅行者の皮相的な報告の充足も必要である。しかも、去年のスペインと今年のスペインとの一番大きな相異、それは、もし今年久方振りにスペインについて書くならば、“ひまわりのスペイン”という題はつけなかったであろう、ということである。

* * * *

今年のスペインは長いこと雨に恵まれず、ほとんど全国的な旱魃である。去年黄色い花を一斉に太陽に向けて咲き誇っていたあのひまわりは、厳しい光線と水不足に、葉も茎も焦がされ、花はまるで太陽をまともに見上げられないかのように、うなだれていた。スペインの主要農産物である大麦、小麦は発育が悪く、今年の収穫は去年の半分にも満たないのではないかと、という悲観的な声さえ聞かれた。川の水量は激減し、小さな川などは完全に干上って、川筋だけが空しくカーブを描いていた。農業を営む人達は深刻である。いや深刻というよりも、ヒステリックになっているとさえ感じられた。「良いお天気ですね」とうっかり言ってしまい、「雨が降ってくれればもっと良いのだが」という言葉返されてはっとした。主人は麦畑の中の道を釣竿片手に歩いていて、鎌を持った農夫に、なにごとかわめき散らされながら追いかけられたという。相手

佐藤



が何を言ったのかは定かでないが、彼らにとって、のんきな外国人が目障りなものも無理はない。

スペインには沢山のダムが作られている。このダムから用水路を通して島に水を運んで居り、ダムはいわば農村の命である。このダムを作るのに、ある時はいくつかの村を水中に埋めなければならない。今回私達が訪れたアギラール・デル・カンポー (Aguilar del Campoo) という町の近くにも、大きなダムが作られていたが、このダムにも三つの村が沈められているという。埋められた村の人達は、ほとんどが近くの大きな町に移り住み、工場などで働いているとのことであった。「水底に村を沈められてしまった人達は気の毒ですね」貯水地で楽しげに水浴びする若者たちを横目で見ながら、また旅行者の軽卒な発言をしてしまった。「これは村の命なのです。このダムの水で私たちの農業は成り立っているのです。」返って来た言葉に感傷はなかった。しかし、これらのダムの水位も、もう10米近く落ちている。もしこのまゝ雨が降らないでいたらどうなるのだろうか。町によっては、すでに給水制限を行っているところもある。暑い夏に清涼感を与えてくれるあちこちの噴水も止められているものが多い。今年こそは、と張り切ってついて来た主人の釣りも、かんじんの川に水が無くてはどうしようもない。場所によっては、ICONA (自然保護協会) が、

続ひまわりのスペイン

Coto (特別狩猟地域) での釣りを、急ぎょ全面禁止したところさえある。しかし、レジャーなどはこの際二の次である。はじめは晴天に恵まれたことに感謝していた私達も、農村の人達のために一日も早く雨が降ってくれることを祈るようになった。しかし、雨に、しかもちょっとした小雨にやっと一日だけあったのは、5日に1度は雨が降るといわれる、カンタブリア地方のトレラベガ (Torrelavega) に滞在していた時だけであった。

* * * *

今年は日本からの旅行者が少しいや、これは日本に限らず、米国からの旅行者も激減したそうだが—ということをあちこちで聞いた。出発前に読んだ朝日新聞で、放射能の影響を恐れてか、ヨーロッパへの旅行者が減り、航空会社が客寄せに知恵をしぼっている、といったことが書かれている記事を読んだが、その時私は、もう一つ大きな原因がテロ行為にあるのではなかろうかと思った。実際、スペインでは放射能の影響はほとんど認められない、ということであったし、私個人としては、6月27日にバラハス飛行場でスーツケースが爆発したりして、テロ行為に巻き込まれることの方がずっと不安であった。事実、今回スペインに滞在している間に、私の知る限りではテロが4回発生している、その1つは、丁度私たちがマドリードに居た7月14日で、ETA (バスク祖国と自由) 分子によって、警察の車が爆破された。リモコンを仕掛けた爆弾車によるもので、8人(最終的に11人、負傷者は56人)の警察官が犠牲になったと報道された。たまたまその翌日、プラド美術館に出かけたのだが、周辺にはピストルや小銃で武装したものものしい警備陣が敷かれて居り、美術館の入口では、一人一人ハンドバッグの中まで調べられるという念の入れようであった。この時始めて、今まで単に観念的に恐ろしいと思っていたテロというものが、急に現実的な身近かな存在として、ひしひしと感じられた。スペイン人の友人の一人から、ETA 分子の活動が盛んなバスク地方やバルセローナへは行ってはいけない、マドリードは大通りだけを歩いて、路地に入ってはならない、と警告されていたが、その時“なあに”と聞き流していたこの言葉が、改めて現実味を帯びて思い起された。

佐藤

* * * *

今年の6月24日、スペインで総選挙が行われ、ゴンサレス首相の率いる社会労働党が、全投票数の44,06パーセント（1982年の選挙では、48,40パーセント）を得て勝利を取めた。しかし、スペインにはまだまだ沢山のフランコ信奉者が居る。もちろん彼らは社会労働党には投票していない。私の友人の一人もそうである。あるかなりの社会的地位にある男性は、どういうつもりか初対面の私の耳もとに口を寄せて言った。「今の世の中を見て下さい。失業者は街にあふれ、犯罪が横行し、誰も安心して生活できません。フランコの時代には、まだ世の中に秩序というものがありません。秩序があつてこそ、民主主義が成り立つのではありませんか？」主人は、ある小都市の郊外で釣りをしている、たまたま話を交した釣り人に、「日本は市民戦争の時にフランコを支援しなかった」となじられたという。去年、私は“ひまわりのスペイン”の中で、フランコの名前や、ファランヘ党の創始者の名前をつけられた地名が、旧名に戻されていることを書いたが、地方では、まだ *generalísimo*（フランコ総統のこと）などの地名が残されているところもかなりあることがわかった。切手はとくに、あの何の変哲もないフランコのプロフィールがただ値段によって色わけされただけのものから、また全く同じように変哲のないファン・カルロス国王のプロフィールのものに変っているが、貨幣の方はまだフランコのものが流通している、しかし、これも額の高いものからだんだんと姿を消してゆくようである。フランコ好きの友人は、「これはもう手に入らなくなるから」とさも大切そうに、フランコの横顔を打ち出したコインの何枚かを、そっと私の手に握らせてくれた。

* * * *

去年はほとんどバスを利用して列車に乗る機会が少なかったもので、今年はかなり列車を利用することにした。ところが、実は日本と同様スペインでも赤字路線がどんどん廃線になっている、ということに迄考えが及ばなかった。ソリア（Soria）という大きな都市からコバルビアス（Covarrubias）という歴史の古い、美しい村に行く時のことである。日本で調べたところでは、コバルビ

続ひまわりのスペイン

アスへ行くには、ソリアとブルゴス (Burgos) という去年も訪ねた大都市とを結ぶ鉄道があり、その鉄道の途中にあるサラス・デ・ロス・インファンテス (Salas de los Infantes) 駅からバスを使えば簡単に到達できる筈であった。ところがである。確かにソリアから線路は走っていたのだが、かんじんの列車は今年の6月に廃線になったばかりで走っていなかったのだ。しかし幸いバスがあったので、サラス・デ・ロス・インファンテス迄は行くことができた。ところが、そこから先はなんとバスもなにも交通機関は全く無い、という。大きな荷物を抱えて茫然としていると、幸い乗ってきたバスの運転手が、近くのバールの息子が内職でタクシーをやっているのを知っていて、わざわざ頼みに行ってくれた。実はこの人、スペインのほとんどすべてのバスの運転手に違わず、道中同行の検札係としゃべりっぱなし、話をするために完全に後を向いてしまったり、両手をハンドルから離して大げさなジェスチャーをしたりして、はらはらさせられ通しだった、おまけに車内に流しているラジオに合わせて歌いだす仕末。私はあまりおかしくて「ふふっ」と笑ってしまったのだが、前から2番目の席に坐っていたので、私の声が聞えたらしく、以後ぶつつり歌を止めてしまった。なにか気の毒なことをしてしまったようで気が咎めていたのだが、この人が検札係と二人で私達の荷物をわざわざタクシーのあるバール迄運んでくれた。あまり親切にしてもらったので、二人をバールに招くと、とても喜んで、しかも驚いたことに、ビールなど注文しておいしそうに飲んでいる。あとでわかったが、スペインでは飲酒運転はそれ程厳しくないらしい。しかし彼らがあまりのんびりしているので、「もう仕事は終わったのですか？」と尋ねると、実はまだブルゴスへの道が続ける途中であった。道端に止めてあるバスに戻ってみると、年寄りのお客が一人辛抱強く車内で発車を待っている。バスはやっと発車し、運転手は合図の警笛を鳴らして窓からしきりに手を振って去って行った。とにかく、コバルビアスに無事到着できたのは幸いであった。

もう一つ、計画通りに運ばず困惑させられたのは、プラセンシア (Plasencia) という、ポルトガルに隣接するエクストレマドゥラ地方 (Extremadura) の小さな町でのことだ。ここも観光客が押しかけるところではないが、いまだ

佐藤

に中世の市壁に囲まれ、迷路のような狭い通りが中央広場からくもの巣状に広がる美しい町である。ここに2泊したあと、85キロほど離れた、同じエクストレマドラにある、王侯貴族の古い邸やイスラムの城壁で名高いカセレス(Cáceres)に向う予定であった。移動日が日曜だったので、念のためにバスの発車時刻を調べにターミナルのインフォメーションに立ち寄ってみた。すると驚いたことに、日曜日にはバスは出ないという。「では列車で行くよりほかないのですね」と念を押すと、一日に一本だけある列車も日曜日は走らないのだという。呆然として、つい「じゃあタクシーもお休みなんですか？」と馬鹿なことを尋ねてしまった。しかし、インフォメーションの男性は落ち着き払った態度で、「タクシーはやっていますよ」と同情するふしもない。カセレスのホテルは予約して、料金も日本で払い込んでしまっているのに、予定を変更するわけにもゆかず、今度は片っ端からタクシーの運転手とカセレス迄の値段の交渉である。結局一番安い5,500ペセタ(今年は100ペセタが日本円の約120円)を出したタクシーにカセレス迄送ってもらうことになった。日本であれば、日曜日は行楽日、かき入れ時である。バスも列車も長距離は増発こそすれ、休みだなどとは考えも及ばないではないか。そういえば、中央広場にある市役所の建物の二階あたりに、「鉄道廃線反対」の幕がはためいていた。つまり、エクストレマドラ地方というところは観光地ではなく、スペインの中でもとりわけ不毛の土地で人口密度も低いから、要するに交通機関の利用者もごくわずかなのであろう。

そのようなわけで、国鉄を利用する計画中、2回は駄目になったが、それでも4回ほど列車に乗ることができた。そのうち2回はTERと呼ばれる急行列車の一等に乗ってみた。適度に冷房が入り、折り畳み式のテーブルつき、椅子はリクライニングもできるゆったりしたもので、乗り心地もまあまあである。それに、一等車だけには列車内のバーからフルコースを出前してくれる。メニューは一種類しかないが、ワイン一本にデザートがついて1,650ペセタ、とちょっとしたレストラン並みの値段である。料理はロジャサラダにいろいろな種類のハム、ソーセージを盛った前菜と、グリンピースをつけ合せたメルルー

続ひまわりのスペイン

サの蒸し焼きで、なかなかの味であった。ただし、スピードを出すと列車がひどく横揺れするために、ワインのびんは今にも倒れそう。コップにつぐ時も少なめにしておかないと振動であふれ出る。ナイフはとうとうテーブルから踊り出して床に落ちてしまい、ワインのびんも始めは手で押えていたが、残り少なくなって油断した瞬間にテーブルから転がり落ちてしまった。しかし、2等車に乗れば席はリクライニングのない向い合わせで、食事はバルへ行ってボカデーリョでも立ち喰いするほかない。日本のグリーン車と普通車の差とは大きな違いである。

ところで面白かったのは、この TER の車掌である。青いワイシャツに黒のネクタイをしめ、金モールをあしらった帽子をかぶっている。仕事は検札だけで、それ以外の時は一等車の一番前か一番後の席に坐っている。はじめマドリードからソリアへ行くのにこの TER に乗った時、車掌が一等車に悠然と腰を下しているのに驚いたが、そのうちその車掌が、乗客の女性とバルでビールを飲みながら、長々と立ち話をしているのを見てあきれてしまった。ところが、次にカセレスからマドリードに帰る時に乗った TER の車掌は、立派な口ひげをはやした男性だったが、なんと乗客の女性（話の内容から初対面であることは確かだった）を例の自分の指定席の横に坐らせ、彼女がとったフルコースの料理の半分をパクパク食べている。おまけに、バルからバナナやケーキ迄運ばせて、仕舞いには禁煙車なのにも拘らず、女性と二人で煙草をもうもうと吸い出した。そしてとうとうマドリード迄の4時間半近く、勤務そっちのけでその女性とひそひそ話を続けているのだ。しかし、ほとんどの乗客はこういう車掌の勤務態度に別に驚く様子もない。マドリード駅に停車してもまだ坐りこんで女性におおい被さるようにして話を続けている車掌の横を、皆すまして出口へ向ってゆく。私たちは呆れてしまい、2度乗った TER の車掌が2度ともこうでは、スペイン国鉄の車掌は100パーセント勤務評定ゼロということになる、という極端な結論に達した。

ところで、昨年私はスペインの列車がどのホームに着くかわからない、ということを書いたが、今回もそれでかなり苦労させられた。なにしろ荷物が重く

佐藤

てそう簡単に移動できないので、駅員やら駅のインフォメーションから早めにホームのことを聞きだそうとするのだが、カセレス駅などは「列車到着の10分前にならないければわかりません」とかえってわれわれのあせりが理解できないといった怪げんな様子。地元の人たちは平然として手前のホームにたむろしている。たしかに列車が入る10分前に放送があり、ホームは2番線ということであった。地下道はあるが、階段を降りてゆく人はごくわずかで、ほとんどの人は低いホームから線路に降りて隣のホームへ渡ってゆく。私たちはもちろん荷物が重いから、いつでもこの手である。この時、最後の一人が丁度線路に降りた時に、「線路を渡らないで下さい。地下道を利用して下さい。」とアナウンスがあった。いかにもその最後の男性だけが悪者にされたようで、皆どっと笑った。このタイミング、いかにもスペインらしいではないか。

スペインの鉄道に関してもう一つ、日本ではあまり考えられないことがある。それは、単線のために上り列車と下り列車がすれ違う時の待ちあわせ時間である。これは急行の TER でも同じことで、やたらと長く待たされると、これでも急行なのだろうか、と思いたくなる。勝手に知った人はいち早くホームに降りて気晴しをしている。うっかり発車されてしまったらと案ずるむきもあろうが、列車の昇降口のドアは手動で、しかもほとんどが走行中でさへ開けっぱなしなのだから全く心配ない。

もう一つ、スペインの列車に関して頭にきたことを思い出した。それは列車の発車時刻に関する情報のいいかげんさである。日本から一応トーマス・クックのヨーロッパの列車時刻表をコピーして持って行ったが、小さな幹線は載っていないからあまり役に立たない。さて前述のアギラール・デル・カンポーからパレンシア (Palencia) という都市に行こうとしていた時である。国鉄の駅は町からはかなり遠くにあるので、観光案内所に行って発車時刻を尋ねることにした。なかなか感じのよいセニョリータが、一日に2本しかないけれども、と言いながら発車時刻をメモ用紙に書いてくれた。それによると、午前中の列車は7時45分発ということであった。仕方なくその日は6時に起き（6時という、スペインでは夏時間で時計の針を1時間進めているせいもあるが、夜空

続ひまわりのスペイン

にまだ星が光っている), ホテルの朝食は8時からなのでこれをあきらめ, フロントにタクシーを頼んだ。するとフロントの男性は「なぜそんなに早くタクシーを呼ぶのですか。列車は8時10分ですから7時半に出れば充分ですよ」と、これも確かに時刻表を見ながら教えてくれたのだ。それならこんなに早起きする必要はなかった, と不気嫌になりながら, 呼んでもらったタクシーに乗ると, 「列車は8時20分ですよ」と運転手は言う。ああ一体誰を信じたらいいのだろう。駅に着いて見ると, タクシーの運転手が言う時間が正しかった。ホームだけしかないような小さな駅で40分もぶらぶらしていなくてはならない。しかし, もしこの間違いが逆で, つまり, われわれが到着した時はもう列車が出てしまった後だったとしたら……そう考えて自分を慰めることにした。

ところで, ブルゴスのある店の主人がおかしなことを話してくれた。彼によると, 数年前, ブルゴスーサンタnder (Santander ブルゴスの北150キロ程にあるカンタブリアの大きな都市) 間の鉄道が計画され, 駅もいくつか作られた。ところがどうしたことかあと30キロを残すばかりのところまで建設中止となり, そのままほっぽり出されているのだそうだ。彼がついでに, と話すところによると, 私たちが滞在していたコバルビアスの近くには, 作りかけて途中で建設が中止になったダムがあるという。実は主人はその地図を頼りに, その架空の貯水池で釣りをしようと楽しみにしていたのだが, 話を聞くとこのダムの場合は, あたりに多くの動物が住んでいることがわかり, 急ぎょ計画を中止したのだそうだ。鉄道の場合の理由はわからないが, 思えばブルゴスーサンタnder間といえば, ごろた石の恐ろしいような山が, 幾重にもまるで屏風のように立ちはだかっている地帯である。スペイン人ならずとも, 働きものの日本人がその技術を駆使したとしても, これに挑むにはかなりの勇気が要るような気がする。

* * * *

ところで, 昨年スペインの交通機関のよそ者に対する不親切さについて触れたが, 今回そのいくつかが改善されているのを見てびっくりした。

その1つは, よそ者にとっては何だか生態がわからないバス停のポールであ

佐 藤

る。実は今回又同じ町へ行って見たのだが、そのバス停のポールの丁度視線のあたる位置に、parada（バス停）と小さく、しかしはっきり書かれた札がつけられているのではないか。私はなんとなく嬉しくなって、一人でニヤニヤしてしまった。

もう一つは、地下鉄車内の駅名のアナウンスである。今回もマドリードの地下鉄には何度もお世話になったが、白とオレンジ色に塗りわけた、はでな新車がかかり入っていた。入口は開ける時は手動、閉る時は自動になって居り、座席は相変らず木製の一人掛けの向いあいである。しかし、それよりびっくりしたのは、突然車内アナウンスが流れて来た時である。これがまたふるって、明らかにテープに録音されたものに違いないのだが、まず男性の声で「次の駅は」というと、女性の声が駅名を言う、という、スペインのラジオ放送でよく使われている、おなじみのパターンである。この型は残念ながら私の好みにはあまり合わないが、しかし車内アナウンスはこれからどんどん他の交通機関でもやって欲しいものである。特に望むのはやはり長距離の列車やバス内でのアナウンスである。長距離バスは2時間か3時間に一度は休けいのための長い停車を行うのだが、いったいそれがどこで行われるのかさっぱりわからない。停留所に着くと運転手は何も言わずにぶいと降りてどこかへ行ってしまい、そこで何分停車するのか、トイレに行って帰って見たらバスは出てしまっていた、などということはないのか、全く不安である。こういった不親切さというか気の利かなさにはあきれ果てるが、今回その秘密主義？のお蔭で、ひやっとする事件があった。サラマンカ（Salamanca）から前述のプラセンシアへ行く時のことである。長距離バスは間違えて乗ってしまったら大変なことになるので、プラセンシア経由カセレス行きであることを運転手にしっかり確認をとり、プラセンシア迄の荷物をまとめたトランク・ルームに私たちのハードケースを入れてもらった。さてこれで安心、とゆったり後部の座席にかけていると、何人かの乗客がバスを降りてゆくのだ。「スペイン人でもやはりバスを間違えることがあるのね」などと言って笑っていた。ところがである。何気なくふと隣に停車しているバスに目をやると、その横腹に開けられたトランク・ルームに、はで

続ひまわりのスペイン

なシールをべたべた貼った私たちのハード・ケースがいつのまにか乗り移っているのではないか。あわてふためいてバスから飛び降り、運転手らしい人に「あのハード・ケースは私たちのもので、プラセンシアへ行くのですが」というと、平然と「ああ、あのバスを急ぎよプラセンシア直行で出すことにしたので、私に移しかえたのですよ」という。私たちがあわててそちらのバスに乗り移ったのはもちろんであるが、はじめに乗っていたプラセンシア経由カセレス行きはどこをどう走って行ったのか、同時に発車した筈なのにその姿は以後一度も見なかった。あの時、もしたまたま窓の外に目をやらなかったら、別のバスに乗せられて行った荷物はどうなただろう。そう思うと、いまさらながらスペイン旅行の心もとなさに、足がふるえてしばらくとまらなかった。

* * * *

去年の私の心配が解決した話をもう一つご披露しよう，“ひまわりのスペイン”で、ブルゴスの大聖堂に寄付を募る言葉が書かれているながら、かんじんの寄付をする場所が見付からなかった，ということを書いたが，今年またその大聖堂へ行ってみると，今度は確かに大きなおさい銭箱が置かれていた。もしかすると去年は，おさい銭の計算でもするために，たまたまこの箱を持ち去ったあとだったのかも知れないが，今年はいやに目につくところに，しかも2ヶ所でこの箱を目撃したのは確かである。このおさい銭箱の他に，マリアの像などにあげるお燈明売りも教会のなにかの収入になる筈である。このお燈明のろうそくの値段は大抵10ペセタ位で，黙って箱にお金を入れてその辺に置いてあるろうそくに火をともし，燭台に立てて拝めばよい。ところで前に述べたパレンシアのカテドラルでは，このろうそくがプラスチックでできていた。四角い箱の中にそのプラスチック製のろうそくが4，50本並んで立って居り，5ペセタを導入口に入れると，そのうちの1本のろうそくに電気がつく仕掛けになっている。あまり有難いようには感じられなかったが，ふと見ると，一番手前のろうそくは，誰かあわて者のスペイン人がまちがえて火をつけたらしく，黒く焦げており，思わず吹き出してしまった。こうしたカテドラルや，小さな礼拝堂を含めて，今年もまたいったい何体のキリストのはりつけの像を拜んだ

佐藤

ことであろう。赤い血がまるでいまにもしたたり落ちそうなお姿に、異教徒は夢の中でまでうなされそうになる。アギラール・デル・カンポのサンタ・マリア・ラ・レアル修導院 (Monasterio de Santa Maria la Real) には、信者に少しでも余計寄付をさせようと、からくりで動くキリスト像があったという。恐がりの私など、小さな窓からわずかに光がさし込むだけの薄暗い教会で、十字架にかけられたキリスト像にちょっとでも動かれたとしたら、気味悪さのあまり腰を抜かしてしまいかも知れない。

* * * *

ところで、自分が願っていたことが実現されるのを見るのは嬉しいが、懸念が現実になるのを見るのは淋しいものである。昨年私はマドリードの地下鉄の入口にエスカレーターをとりつける工事が盛んに行われているのを見て、サラマンカのバスのターミナルのエスカレーターが動いていなかった例をひいて、これと同じ運命をたどらないことを祈る、と書いた。そのエスカレーターの取り付け工事は確かに完了していたが、案の定そのうちのいくつかはもう動いていなかった。通行人が捨てるごみがつまっているようだった。例のサラマンカのバスターミナルのエスカレーターは今年も動いていない。ということは、修繕もされていないのだろう。しょせん、と言っては少し気の毒な気もするが、スペイン人のあのごみが無神経に捨てるくせを直さない限り、エスカレーターをつけるのはあきらめた方がよいのではなからうか。

いやなことを書いたついでにもう一つ言わせてもらおうと、今回はたった1つの小包を出すのに大変な苦勞をさせられた。というのは、いつもは本だけを送っていたので問題はなかったのだが、サラマンカ迄来てあまり荷物が多くなったので、うっかり本と衣類を一緒にして荷造りしてしまった。近くの郵便局へ持って行くと、「衣類と一緒にここでは受け付けられません」と言う。仕方がないので、町の本局へ持って行った。すると、船便はここではなくて国鉄駅の郵便局へ持って行ってくれという。また仕方なく、そこから2キロも離れた国鉄駅迄、じりじり照りつける太陽のもと、重い小包を持ってやっとたどりつき、やれやれこれで身軽になれると思いきや、「小包はダンボール箱に詰めて

続ひまわりのスペイン

なければ受け付けられません」と窓口の女の子。本を送った時は小包紙で包んだだけで受け付けてくれたのに。「じゃあどこで箱を手に入れればよいのですか?」「さあ、文房具屋にでもきいてみたらどうかしら」。結局ホテルに小包を持ち帰り、ダンボールの箱は小さな食料品店でわけてもらった。しかしとても駅まで戻る気にはなれないので、衣類は送らないことにして、本だけを念の為にダンボール箱に詰めて、再び近くの郵便局に出かけた。すると、なんと今度は閉っているではないか。前の店の人に尋ねると、一時半で終了だという。あれ、今日は土曜日だったかしら、と思ったが、いくら考えてみても木曜日の筈である。40度近い暑さの上に、腹が立って頭からぼっぼっと煙が立つような思いだった。

* * * *

いくらスペインびいきの私でも、なんとも我慢のならないのが乞食である。今年は去年よりも減っているどころか、ますます増えているようにさえ思われた。しかも、以前は乞食というと、ほとんどが色の浅黒い黒髪の子プシーとか老人であったが、今は体格もがっしりした、成人の男性が路上喫茶のテーブルの間をほどこしをせまって——確かにその態度は“せまる”という表現がぴったりする程迫力があつた——めぐり歩いている。ある男はすでにいくらかのお金が入った紙コップを一人一人の目の前に突き出し、又ある男は“家族を養わなくてはならないのです”と言って、ポケット・ティッシュをいくらかで購入してくれ、といわんばかりに差し出した。別の男の乞食は、一人でテーブルについていた中年の女性の前に汚い手をにゅっと突き出し、お金を出す迄は引き下らないぞ、という顔で威かくしていた。数人でテーブルについている人達のほとんどは、首を横に振ったり、相手にしないでいるから、彼らはすごすごとひき下るが、一人で席についている女性は良いえじきのようにであった。子供の乞食も多く、マドリードのグラン・ビアでは、6才位の白人のかわいらしい男の子が紙コップを持ってテーブルの間を廻っていた。主人は乞食用にいつもポケットに1ペセタか5ペセタのコインを用意していたが、すでに1ペセタは乞食にも価値がなくなつたらしく、1ペセタをやって乞食に拒否されている人も

佐 藤

見た。私がいつも泊ることにしているグラン・ビアのホテルは隣りが改築工事中のために、去年のジプシー親子の乞食の姿はなかったが、別の老婆とその娘らしい、子供を抱いたジプシーを見かけた。夜中の2時頃に窓からグラン・ビアを眺めていると、店仕舞い？するらしいこの一家が集って、老婆が娘にじゃらじゃらと今日の収入を与えている。その後、閉店したばかりのマクドナルドのボーイと一言二言、言葉を交し、残りものらしい食物をもらってそれを噛りながら去って行く。すると途中、いつも路上に店を出している煙草売りの小母さんが、売り上げ金の中からいくらかつかんでその親子に与えた。グラン・ビアには煙草屋は沢山あり、おまけに人気のある煙草が日本円の50円位のものだから、彼女の一日の収入などたかが知れたものであろうに。

ジプシーと言えば、先に触れたエクストレマドーラの小都市プラセンシアで、大勢のジプシーを見た。彼らは市壁の下を流れるヘルテ川の河原に、赤、黄、緑などはでなテントを貼り、その周囲で煮炊きしたり、洗濯物を干したりしている。昔のジプシーは馬車で移動していたものだが、今のジプシーはトラックに家財道具を積んで旅するらしく、彼らの大きなトラックが何台も橋のたもとに駐車してあった。ジプシーを毛嫌いする気はもうとらないが、彼らの目つきは戦闘的で警戒心に満ち、仲間以外には決して気を許さない気構えが感じられた。時々このジプシー達が町の市場に姿を現わしたが、彼らは“この肉は臭い”など、なにかといちゃもんをつけては値切っているようであった。だから商店の人たちもジプシーがやってくるといらいらし、私たちに対してもとげとげしくなるので、そんな時は買物をあきらめて逃げ出すことにきめた。このプラセンシアも、いまだに中世の雰囲気をとどめる静かな美しい町で、たまたま親しくなったこの住人というスペイン人に“是非プラセンシアに住みなさい”といわれた時は、「そうね」と言いたかったが、正直なところ言葉につまってしまった。

* * * *

今年はいじめて宝くじを買ってみた。自分の国の宝くじさえ買うことはないのだから、スペインのものも、街頭で「今日が最終日」とかなんとか聞きとり憎

続ひまわりのスペイン

い独特の言葉で叫んでいるのを、ただうるさいと思って聞き流していただけた。今回そんな宝くじを買う気になったのは、サラマンカで訪ねた、宝くじマニアのレストランの主人に勧められたからだ。この人は一等が当ることを夢見て30年間買い続けているそうで、それでも今迄費したお金が無駄になると思うと、やめられないのだと言う。スペインの宝くじは国が発行するものと、身体傷害者の人たちが売るものがあり、国の宝くじは毎週土曜日に抽選がある。身体傷害者の人たちのものは、値段も一枚100ペセタと安く、賞金も少い（200万ペセタ）が、毎日抽選を行っている、ということもはじめて知った。国の宝くじ売場は日本と同じようにあちこちにあるが、個人的に売り歩く人もあり、この日たまたま、なじみの宝くじ売りの小母さんがレストランに入って来たので、私も買う破目になってしまった。宝くじの値段は賞金によって一定でないそうだが、その時は500ペセタ（賞金額400万ペセタ）だった。スペインの物価から考えるとずいぶん高いような気がしたが、ゆきがかかり上仕方がない。もちろん次の日曜日、新聞の当選発表欄を早速見たが、最下位の下1桁も当ていなかった。

* * * *

スペインの各地には、パラドール・ナショナル (Parador nacional) つまり国営ホテルが約80軒あり、そのうちの約30ヶ所は古城や旧領主の館、豪族の邸宅、あるいは修道院などを利用して改造したものとされる。室内の装飾も、その建物の時代にあわせた古めかしいもので、国としては、くずれかけたお城や修道院の保存にも役立って、一挙両得となるそう。比較的料金が安い上に、設備やサービスは高級ホテルなみといわれ、旅行者としては誰しも一度は泊ってみたい、と願う場所だが客室数が少なく、なかには20室ほどしかないものもあり、しかもほとんどがアメリカ人のツアー会社によって一年前から予約されてしまって、なかなか一般人には高嶺の花のようである。しかし、今年は、前述のコバルピアスという、あまり人の行かない村のパラドールに泊ることができた。これは、町の中央広場に面した豪族の邸宅を改造したもので、昔は地下室に大きなワインの貯蔵庫があったという。調度品も、スペインの伝統的な木

佐藤

彫をほどこした黒塗りのもので、朝食を食べるのに当てられている小じんまりした部屋の奥には、いろいろがあり、天井から古い鉄鍋がさげられていた。部屋の小さな窓から外をのぞくと、狭い露路をへだてた隣りの家の白い壁がせまっている。どの道もやっと車一台が通れるか通れない程の狭さで、この道を荷車をひいてゆく、あるいは放し飼いにされたまゝ水を飲みに行く馬やらばが時折りゆきかう。事実、ここではまだ馬やらばが重要な労働力であるらしく、らばが車をひくかわいらしい絵をつけた交通標識さえあった。同じ中央広場に面した郵便局のある建物は10世紀のもので、入口の上の磨滅した紋章がその古さを物語っている。この村は今でこそさびれているが、カスティリヤの揺籃の地といわれる由緒有る土地なのである。

このコバルビアスは、またさくらんぼの産地として有名である。到る所で大きなさくらんぼの木が真赤な実をつけているのが見られ、梯子をかけてこのルビーのような実をもぐ家族の姿があちこちにあった。そして、ダンボールの箱一杯に詰められたこのサクランボは、ブルゴス行きのバスの運転手に託される。しかし、時にはバスが旅行者の荷物で一杯になり、積み残しがでることもある。ある日、一人の老人が、運転手に積み込みを断われ、広げた両手を高く差しあげて嘆き悲しんでいるのを見た。ここのサクランボは甘くてとてもおいしかったが、上等なもので500グラムが90ペセタ、約100円である。ダンボール一杯のサクランボは一体いくらになるのであろう。しかも、この村は物価が全体的に安く、例えばフランスパンが2本でたった35ペセタ、40円ちょっとなのだ。私はパン屋のお婆さんに、「日本だったらこれが200ペセタ以上もするんですよ」と言ってみたが、彼女には全くぴんとこなかったようだ。

ところで、こうしたパラドールでは、その土地の郷土料理を食べさせてくれる、というのでも評判がよい。コバルビアスのパラドールでは、この土地の名物料理という *Cordero asado* (仔羊のステーキ) を食べてみた。大きな骨つきの肉が、にんにくの香りつけで焼いてあるだけの簡単なものだったが、独得のくさみが全くなく、なかなかおいしかった。東京でも同じだが、スペインでも各地の郷土料理のほとんどはマドリードで食べられるし、大きな都市のかな

続ひまわりのスペイン

りのレストランならば大抵メニューにのっている。しかし、今回、絶対にその土地のレストランでなければ食べられないような料理を試してきたので、それを是非ごひろうしたいと思う。前述したエクストレマドゥラ地方は、実は今度始めて足を踏み入れたこともあり、いろいろな点でとても楽しみなところであった。この土地は古くから大変貧しく、それゆえに新大陸の征服者の主力となった人たちは、コロンブスは別としても、ほとんどが新しい土地を求めたエクストレマドゥラ人たちである。だから、私たちが訪れたカセレスの町（インカを征服したピサロ、メキシコの征服者コルテス、アマゾン河口まで下ったオレリャナなども、カセレス県出身である）にも、ピサロの騎馬像をはじめとして、“征服者広場”とか、“アメリカ広場”“エルナン・コルテス通り”など、アメリカ征服にちなんだ地名が多かった。さて、ここの郷土料理ということで、私はミガス・アル・エクストレメニョ（Migas al extremeño エクストレマドゥラ風パン屑とでも訳すより他ない）というのを注文してみた。出てきたものを見ると、パンを細くきざんだものを、チョリソと呼ばれる腸詰めをきざんだものといっしょにオリーブ油でいためて油を吸わせたものに、目玉焼がのっかっている、というだけのもの。正直なところ、スペイン料理はどれでもほとんど口に合ったけれども、これ程まずいものを食べたのははじめてであった。主人が注文したチャンファイナ（Chanfaina）は、臓物をトマトと少しのお米と一緒に、豚の血を加えて煮込んだもので、給仕に説明を聞いた時はなんともまずそうだったが、恐る恐る口に入れてみると、案外食べられた。しかし隣の席のアメリカ人らしい女性はとうとう食べられず、ほとんど手をつけないまま残してしまっていた。この町でも日本人は珍しい存在らしかったが、中年の給仕が私たちの席にだけなん度も来て「味はどうか」とか、「気に入ったか」とか尋ねるのには閉口してしまった。

ところで、ホテルへの帰り道で、はたと気がついて大笑いした。つまり、私が食べた“パン屑料理”は日本で言えば残飯整理のメニューではないか。エクストレマドゥラは貧しい土地だから、人々は残ったパンと、同じく残りもののチョリソをきざんでオリーブ油でいため、その上に目玉焼をのせて一皿の料理

佐藤

に仕上げたのに違いない。主人が注文した臓物のシチューだってそうではないか。チャンファイナという聞きなれない単語を辞書で調べてみると、“臓物を煮込んだシチュー”のほかにも、“まずいシチュー”という普通名詞でもあることがわかった。

* * * *

スペインから帰ってくると、日本の生活のあまりの便利さに改めてびっくりさせられる。私たちはこの便利さに慣れっこになっているので、なにごともしなかなかにスムーズに運ばないスペインで歯がゆさにいらいらし、腹を立てはじめる。しかし、それにも拘らずなぜこれ程迄にスペインに愛着を感じるのでしょうか。もちろんその歴史的文化遗产は最大の魅力である。しかし、それとは別に、逆説的ながらそのスペインの生活の不便さ、テンポのおそさ、手際の悪さ、そして時間を超越した暮らし方や粗朴な人間味、こうしたものがわれわれに得がたい安らぎを与えてくれるのかも知れない。われわれが失ってしまった何かが、スペインにはまだやっとなに残っているような気がする。しかし、もうそれも時間の問題であることはわかっているが…。

サラマンカで、たまたま深く岩盤で地面を深く掘っている工事現場を通った。中をのぞきこむと、地層は固い岩盤でできており、近代的な機械をもってしても、これを掘り進めてゆくことは、並大抵のことではなからうと思われた。スペインの古い城壁や要塞の多くは、こうして大地にしっかり根をおろしている岩石を利用して建てられているという。現在でも倒れずに残っているこうした歴史的建造物が多いのは、一つにはそのためであろう。しかし、こうした地質が、逆に現在の発展を大きくはばむ障害となっていることも否めない。私は突然旧約聖書のヨブ記の中の“あなたは野の石と盟を結び…”という一節を思い出した、その解説には“石だらけの畑はたがやしにくいので、幸せな人の畑には石がない”とあった。

スペインの国土の40数パーセントが農地といわれるが、地味がやせているためにその3分の1以上が各年休閑地となる。スペインの野でだんだん模様をなしている赤褐色の部分は、土を掘り返したこの休閑地である。そして、そ

続ひまわりのスペイン

の残りの3分の2足らずが今年は早魃に悩まされている。スペインはそもそもが乾燥した国土であるから、もっぱら耐乾性のある麦、ぶどう、オリーブなどを栽培してきた。しかし今やスペインは乾燥した荒地の国から緑豊かな国に変わろうとしているのだ。それなのに…あの焼きこがされ、こうべを垂れたひまわりの花を思い出す度に、私の目頭はなんとなく熱くなってくる。

一日も早くスペインに、雨よ降れ！

(1986年9月)